

中国では昔から結婚の「嫁入り道具」を用意するのは男性の側である。もちろん恋愛中のデート代や食事代などすべての交際費用も男性が持ち、日本のように二人で割り勘をする習慣はない。中国では娘のことを千金(チェンジー)と呼び、家に娘が三人いれば大金持ちになると言い、逆に息子が二人いれば破産すると言う。

中国人の結婚観は、一九四九年中華人民共和国が成立して以来、時代とともに変遷してきた。結婚も服装の流行と同様で、時代の背景や動きなどを反映している。大躍進時代の五〇年代、中国人女性は建国のために工場で働いている労働者を結婚相手に選んだ。文化大革命時代の六〇年代には、身分が良いとされる農民に嫁いだ。この時代、嫁入り道具はまだ必要ではなかったようである。結婚式や披露宴といったものもなく、お茶とあめ玉でお客をもてなした。

富国強兵時代の七〇年代は国を守る軍人を選んだ。このころの嫁入り道具は自転車、腕時計、ミシンとラジオの「三転一響」が登場するようになった。中国に留学ブームが到来する八〇年代はインターネットかつ海外とつながりのある知識

中国の結婚事情

久場 未雲

階層ももてた。九〇年代は改革開放に成功した金持ちを選ぶようになり、嫁入り道具も大幅に変化した。その結果、高級マンション、車、海外旅行に現金までも用意するようになった。二〇〇〇年に入ると、中国人女性が望む男性像は、お金持ちというだけではなく、高い知性も要求されるようになる。住宅、お金、学歴、さらには職場におけるそこでこの地位も必須条件となり「愛情と物資同等」という傾向になりつつある。

近年、都会の若い女性に結婚よりキャリアを重視する人や、結婚しても子供はいらないと言う人が増えてきた。まさに中国の現代っ子の出現である。飽くことなく理想を求め続ける中国人女性の結婚観は、北京オリンピックや上海万博後さらに変化することだろう。それに加えて世界に例を見ない「一人っ子政策」の影響もあり、中国は、現在日本が直面している高齢化社会や人口減少問題に遠からず向き合うことになる。問題の深刻さは日本の比ではないと言われている。杞憂であればと願うばかりである。

(会社代表)